

◆ コスモエネルギーホールディングス（証券コード：5021）

2024 年度 第 1 四半期 アナリスト・機関投資家向け決算説明会 質疑応答

－本資料には、将来見通しに関する記述が含まれています。末尾に注意事項を記載しています。－

1. 日時 : 2024 年 8 月 9 日（金） 18 時 30 分～19 時 20 分
2. 出席者 : 60 名
3. 主な質疑内容 :

Q1：1Q業績は順調、会社計画より上振れていると思う。主な上振れは石油事業だと思うが、背景や数値を含めてセグメント別に教えて欲しい。

A1：石油事業が好調、それ以外は 5 月公表並み。石油事業はマージンが公表差で +2.2 円。そのうち、タイムラグが +1.1 円、実マージン改善 +1.1 円。実マージン改善は、物価上昇に伴った価格転嫁であり、23 年度下期からマージン水準が一段切り上がっている。

Q2：洋上風力は長年手掛けてきた案件の入札を見送ったものだと推察するが、背景を教えて欲しい。残念な部分はあるが、採算を見極めた上で判断したと想像する。前向きに受け止めていいか？第 2・3 ラウンドまでも含め、大規模な投資が発生しないということだと思うが、資金配分の考え方を变える予定はあるか。次期中計の話になるかもしれないが。

A2：公募指針や当局からの指導で、個別海域についてはお伝えできない。金利やインフレ影響でコスト上昇があることに加え、電力価格もあって、現時点での洋上風力採算は厳しいと判断し、入札を見送った。但し、洋上風力から撤退するわけではなく、引き続き、経済性を見極めた上で判断をしていきたい。現時点で具体的に資金配分を見直す予定はない。

Q3：自己資本 6,000 億円について、改めて確認したい。現中計期間中の株主還元方針は変わらないと思うが、長い目線で見るとはどうか？次期中計以降は、改めて考え直すというスタンスか？

A3：自己資本 6,000 億円は、あくまで現中計における事業資産とリスクから試算したもの。次期中計はこれからの検討になるが、ポートフォリオやリスクの見方が変われば、見直しが必要だと思っている。

Q4：還元の考え方について、現中計では自己資本 6,000 億円を超えた分は原則還元との理解だが、1Q の段階で既に超過している現況。このような状況を踏まえて、追加株主還元の時期についてどのように考えているのか。年度末にならないと今年度の収益が固まらないので追加還元はないということなのか、それより早期の可能性があると考えていいのか。

A4：できるだけ早期還元実現を考えていきたい。しかしながら、まだ 1Q であり、時期は今後検討していく。

Q5：公募入札を見送り、資産化したものが特別損失となったが、現時点で洋上風力としてどの程度資産化しているのか、可能な範囲で伺いたい。

A5：現時点で、洋上風力において追加で損失が発生するような資産はない。

Q6：洋上風力については、残り 3 件が資料に残っているが、プロジェクトを進めるうえでネックになるとしたら、どんなポイントか？電力に環境価値が今以上に乗って評価されないと採算が合わないのか。コストが問題なのか。

A6：環境価値を含めた売電価格、コストの双方がネックになりうる。

Q7：石油事業における今後のマージンについて、どう見ているか？

A7：昨年の下期頃からマージンが一段改善している。今後補助金がなくなったらどうかという議論はあるが、足元の状況も鑑みると、一定程度のマージンは確保できている。

Q8：製油所の稼働率について。トッパー稼働率を見ると、ややトラブルがあったのかなという風に見えるが、状況についてもう少し詳しく教えて欲しい。

A8：資料にもある通り、定期整備を除いたベースの稼働率である SD ベースの稼働率は 97%。完全満足ではないが、かなり高い数値。定期整備を含めた CD ベースの稼働率は 75%だが、千葉で大きな定修があったことが要因。

Q9：グリーン電力販売について、洋上風力を見直す一方、陸上風力はコーポレート PPA での販売を拡大していくとの理解。コーポレート PPA によって収益性が改善しているとのことだが、これはコスト削減によるものなのか、非化石価値が高く評価されたということなのか。

A9：元々は FIT であったが、今回のようなコーポレート PPA では、非化石価値が評価され、FIT を超える採算性が期待できる。加えて、20 年と長期にわたって保証される契約となり、安定した収益につながる。経済優位性があり、積極的に進めている。

Q10：コーポレート PPA によって契約する場合、顧客は一定の電力を安定的に求めているのに対し、風況により発電量が変動するリスクがあるが、これはどのように管理していくのか。

A10：個別の契約については、詳細は控えさせていただくが、お客様との協議により定めていくかたちとなる。

Q11：ROIC は中計目標が 6%。セグメント別の ROIC について、6%を基準に教えて欲しい。今回ピックに上がっているグリーン電力のコーポレート PPA は 6%を超えているのか？

A11：23 年度の全社 ROIC は 7.6%。社内では既にセグメント別のモニタリングを開始しており、更なる資本効率向上に向け、収益力強化に加えて投下資本の再点検に着手している状況。各セグメント別の開示については引き続きの検討課題とさせて頂きたい。コーポレート PPA において ROIC が 6%を超えるのか、ということについても詳細の数字はご容赦いただきたいが、従前の FIT によるケースより良いのは間違いない。

Q12：岩谷産業の提携について。今後の時間軸とシナジーの規模感は？

A12：4 月に資本業務提携を締結。両社で考えるシナジー案件を洗い出し、蓋然性の高そうなものについて詳細検討を進めているところ。24 年度中に少なくとも 1 件はやっていきたい。装置の FS から

始める案件も多いので、24 年度に発表して 25 年度からすぐに収益が出てくるかという点、現時点ではお答えしづらい。なるべく早く進めていきたいと思っている。

Q13：2 Qに入ってから千葉のトッパーが停止したとの情報があるが、2 Qへの収益影響は？

A13：千葉製油所の定修立ち上げが少し遅れたものの、不具合の原因はすべて解消しており、足もとでは通常運転になっている。不具合の影響は大きくないと見込んでいる。

Q14：四品マージンのタイムラグについて、絶対値で教えて欲しい。

A14：24 年度が 1.7 円、23 年度が▲0.7 円。前年差で+2.5 円（端数を含む）。

Q15：業績予想を据え置いた背景を教えて欲しい。

A15：1Q 業績上振れは主に石油事業、主な要因はマージンで公表差+2.2 円。そのうちタイムラグが+1.1 円だが、原油価格次第では変化する可能性があることもあり、1 Q時点では据え置いたということ。特に不安要素があるわけではない。

以上

本書の記述及び記載された情報は、将来についての計画や戦略、業績に関する予想および見通しの記述が含まれております。これらの記述は、現時点で入手可能な情報から判断した見通しによるものです。このため、実際の業績は、様々な外部要因により、本書に記述および記載された情報とは異なる結果となる可能性があることをご了承ください。